

～3.0 mm の範囲であって、すべての苞は、子房より明らかに大きかった。産地別では、No.1 の4個体が長さ 4.5 mm～6.5 mm、幅が 0.7 mm～1.8 mm の範囲であったのに比べ No.3 の6個体は長さが 3.5 mm～5.5 mm、幅が 0.3 mm～1.3 mm の範囲で比較的的小型であった。No.2 の1個体では、長さが 3.5 mm、幅が 0.8 mm であった。苞の外形は、線形、広線形～線状披針形または長楕円形などで、同一産地内でも個体によって様々な形を示したが、No.3 の個体は No.1 と比べ細いものが多かった。

Koidzumi (1937) は、キンキヒョウタンボクをコウグイスカグラと区別する特徴として、①苞が糸状 (filiformibus)、②葉はやや菱形状卵形～披針形状卵形、③葉の先端が鋭形という3形質を挙げている。これらの特徴によれば、広島県産の個体は、苞の形が異なる場合もあるがおおよそキンキヒョウタンボクの範疇に入るのではないと思われる。しかしその後、大井 (1953a) は、「①葉は通常幅が狭く、②先端が細く先が鋭尖形になり、③苞は細く、④ほぼ子房と同長程度の大きさ」と記し、原・大場 (1989) は、「①葉は卵状披針形から披針形で、②先端は鋭尖、③苞は線形で、④長さは 1.5 mm～2.5 mm」とした。現在受け入れられているこれらの特徴によれば、今回調査した広島県産の標本は、①葉身の外形には変異があり、卵状披針形に近いものもあるが、披針形のものではなく、広義のコウグイスカグラ (Fig.2m) に近い。②葉先の形状は鋭形で、鋭尖形に近いものもある (Fig. 2d)。③苞の形は線形～長楕円形まで様々で、集団としてはキンキヒョウタンボクの特徴とは異なる。④苞の大きさは、長さが 3.5 mm～6.5 mm の範囲にあり、子房の長さ (1.7 mm～3.0 mm) に比べると明らかに大きく、キンキヒョウタンボクの特徴とは異なる。以上のように、予備的な調査の結果では、広島県産のキンキヒョウタンボクは、広義のコウグイスカグラ (*L. ramosissima* Franch. et Sav. ex Maxim. var. *ramosissima sensu lato*)、原・大場 (1989) らに従えばチチブヒョウタンボク (*L. ramosissima* Franch. et Sav. ex Maxim. var. *ramosissima* f. *glabrata* (Nakai) H.Hara) とみなすのが妥当であることが示唆された。

広島県にキンキヒョウタンボクが分布するとした最初の文献は、大井 (1953a) と思われるが、その経緯は不明である。S-Net サイト上でキンキヒョウタンボクの標本情報を検索した結果、国立科学

博物館植物標本庫に、広島県で採集された標本が収蔵されていることが分かった (国立科学博物館 (植物) TNS58096)。それによると、標本は、田代善太郎氏が 1937 年 9 月 15 日に現在の広島県廿日市市吉和で採集したもので、採集地は今回調査した産地 No.3 と同じ地域であった。また、写真による葉の外形は卵形で先端部は鋭尖形状に尖り、今回調査した産地 No.3 で見られるものと同様であった (Fig. 2i)。写真では苞の形は判別できないが、今回の調査で No.3 では、線形の苞を持つ個体も観察されている (Fig. 3f, h, j)。以上のことから、この標本は、Koidzumi (1937) の特徴によるキンキヒョウタンボクとされ、広島県にキンキヒョウタンボクが分布するという根拠になったと推察される。

本変種は、三重県、滋賀県、兵庫県などで新しい自生地が発見されているが、基準産地とされる六甲山では、その自生が確認されなくなっている (小林ほか 1998)。また、香川県でも環境変化のため近年自生が確認されていない (香川県レッドデータブック 2004, 久米 修氏私信)。今後調査を進めて広島県産の植物とキンキヒョウタンボクの関係性を明らかにすることは、本変種の絶滅危険度を評価するうえでも必要と考えられる。

謝 辞

本稿をまとめるにあたり、広島大学大学院統合生命科学研究科の山口富美夫教授に貴重な助言をいただきました。新たな自生地の調査では、高杉茂雄氏の協力を得ました。国立科学博物館植物研究部の遊川知久博士には、標本写真の閲覧等に便宜を図っていただきました。久米 修氏からは、香川県内の自生地の現状について情報をいただきました。記して感謝の意を表します。

摘 要

広島県産のキンキヒョウタンボクの分類学的特徴を明らかにするため、予備的な調査を行った。その結果、広島県に産するキンキヒョウタンボクと呼ばれている植物は、広義のコウグイスカグラ、厳密にはチチブヒョウタンボクとされる可能性が高いことが示唆された。